

われもこつ 第46号

2025年4月16日 発行

われもこつの会って
どんな会？

「われもこつの会」は「野の花の居場所づくり」の活動をしています。

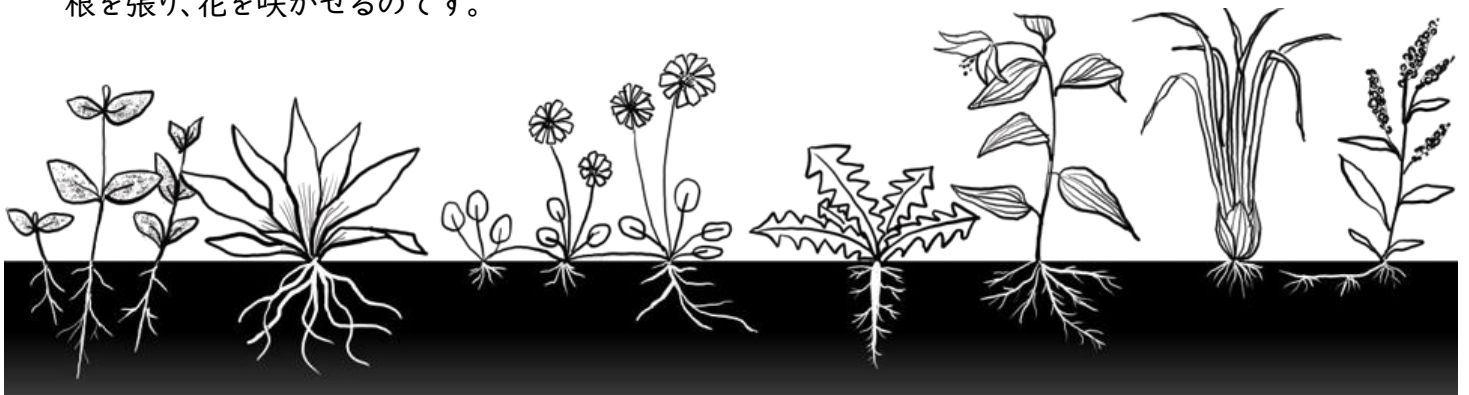
具体的には
何をしてるの？

庭や空き地は放っておくと、ヒメジョオンやセイヨウタンポポ、ブタクサなどの外来種、スギナ、オオバコ、ヤブマメやススキなどが生い茂り、あっという間に藪になってしまいます。私たちは、そうした草や灌木を刈ったり抜き取ったりして、もともと軽井沢で自生していた草花が繁殖するための環境づくりをしています。

つまり「花壇づくり」
ってこと？

「花壇づくり」とは異なります。花壇の場合、「このような花をこの場所に」といった「設計」を行い、品種改良を経た強い草花を植えれば、目論見通りに花が咲き、庭を「デザイン」することができるでしょう。

私たちが目指して取り組んできたのは、多様な生態系を備えた「原っぱ」という環境づくりです。山野草が繁殖できる環境を整え、後は自然に任せる。つまり、山野草は自身の力で芽を出し、根を張り、花を咲かせるのです。



われもこつの会の原っぱ 開花カレンダー	p.2
我が家の庭「カルイザワテンナンショウ」	p.3
山野草と茶花「その2 今も続くお茶」	三原 静子	p.4
染料植物賦「小鮒草(コブナグサ)」	たかの きみこ	p.5
本好き会員のおすすめ本紹介	p.6
仲間を悼む	p.7

原っぱづくり
一緒に楽しみませんか



われもこの会の 原っぱ 開花カレンダー

開花時期

5月 6月 7月 8月 9月 10月

サクラソウ						
ルリソウ						
コンロンソウ						
スイセン						
エンレイソウ						
アヤメ						
ヤマオダマキ						
シモツケソウ						
ヤマホタルブクロ						
オカトラノオ						
ウツボグサ						
フタリスズカ						
チダケサシ						
ヒルガオ						
オオバギボウシ						
ウマノアシガタ						
コバギボウシ						
イヌゴマ						
マツムシソウ						
ユウスゲ						
キキョウ						
カワラナデシコ						
ワレモコウ						
オミナエシ						
ノコンギク						
クルマバナ						
ヒヨドリバナ						
ミズヒキ						
ツリフネソウ						
フジバカマ						
ノハラアザミ						
カリガネソウ						
アサマフウロ						
ゴマナ						
ヒキオコシ						
ナンテンハギ						
メハジキ						
ヒナタノイノコヅチ						



「われもこの会」が発足したのは、長野オリンピック開催の前年、長野新幹線が開通した一九九七年です。当時、軽井沢町内には、これらに関連する土木工事の廃土があちこちでむき出しになっていた、宅地や商業地の開発も急速に進んでいました。

軽井沢らしい風景が失われてしまう

危機感を抱いたメンバーが集まり「われもこの会」を結成。「軽井沢らしさ」を取り戻すために何ができるだろうと考え、かつて軽井沢に咲いていた野の花を増やすことから活動をスタートしました。

「空き地に野の花を！」をモットーに

活動拠点は二か所の空き地。私たちはそれらを「原っぱ」と呼んでいます。「発地の原っぱ」は軽井沢南保育園の道路を挟んだ南隣、約二五〇㎡の私有地。もう一つの「前原の原っぱ」は、塩沢通りから新幹線南側の側道沿いに入ったところ、約六五〇㎡の町有地です。（裏表紙の地図も参照ください。）

雑草が繁茂する藪だった空き地に野の花を植えて二十七年、空き地はさまざまな山野草が季節ごとに咲き誇る「原っぱ」へと姿を変えました。

原っぱは野の花の展示場

私たちの「原っぱ」は、軽井沢町全体から見るとほんの微々たる存在ですが、少なくとも道路のすぐそばで咲き乱れる山野草を見られる、わずかな土地の二つであることは確かです。

山野草は環境が合えば勝手に増える、強い生命力の持ち主。自宅の庭で山野草を育てたい方、原っぱでの作業を通して、その環境づくりの方法と一緒に学びませんか？

原っぱに遊びにおいでよ！

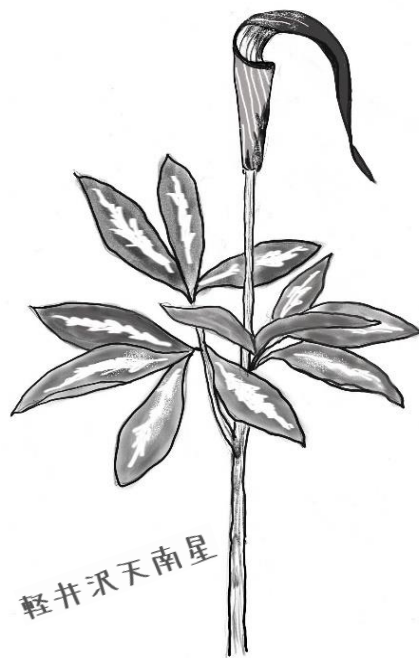
我が家の庭

カルイザワテンナンショウ

サトイモ科テンナンショウ属

我が家の庭は山桜、紅葉、モミの木等の木が多く、程よい日差しと日陰が混ざっている。裏に山を抱え、雨水も流れてくる湿り気の多い場所に位置する。

梅雨の始まる頃、庭のところでどこかにスーッとアスパラガスのような茎が五、六本地面から



軽井沢天南星

その花らしきものの下部はトランペットを上に向けたように広がり、その部分は淡い緑色をしている。これは実は花ではなく、「仏炎苞(ぶつえんほう)」と呼ばれる苞(ほう)である。仏炎苞の上部は細い三角の形に長く伸びて、先が垂れ下がっている。紫色から黒に近い色をしたこの部分は、「舷部(げんぶ)」という。

この花は、大正十五年に植物学者の原寛博士によつて軽井沢町離山で採集され、「カルイザワテンナンショウ」と名付けられた。同種は三重県や奈良県にも分布していて、「ヤマトテンナンショウ」と呼ばれ、こちらが正式名称のようだ。

朝夕に草木を吾の友とせば
心淋しき折りふしもなし

と、植物学者の牧野富太郎博士は詠んでおられる。私もこのような気持ちで、我が庭を眺めて過ごしたいとつくづく思う。

カルイザワテンナンショウが花開くのは六月中旬。今年もじっくり観察して、新しい発見をしたい。

その後、しばらくして見てみると、縮れた葉はヤツデの葉のようにピンと開いている。茎の先は人の顔から髪の毛を垂らしたような、怪しげと言うか、奇妙な花らしきものが開いている。

テンナンショウの仲間たち ～その不思議な生態～

1974 年発行の「軽井沢の植物」(元軽井沢植物園長の故佐藤邦雄先生ほか著)によると、テンナンショウ属は軽井沢で 6 種(ヒトツバテンナンショウ、カルイザワテンナンショウ、コウライテンナンショウ、ミミガタテンナンショウ、ヤマジノテンナンショウ、オオマムシグサ)が確認されている。カルイザワテンナンショウは仏炎苞片がほっそり長く、尾状に尖り、黒紫色なのが特徴。オオマムシグサと同じ 6 月中旬から咲く。

中国では、いくつかの種の塊茎が漢方薬として使用されてきたが、根、茎、葉、果実など全草毒性。誤食すると口内に焼けつくような痛みが起こり、腎機能障害に発展することもあるため注意が必要。

雌雄異株^{しゆういしゆ}で、最初の数年は葉のみで無性個体。成長すると雄株になり、栄養を貯め、さらに大きくなると性転換して雌株になる。実をつけて栄養が足りなくなると雄株に戻る。

姿形が独特!?

性転換する!?

有毒!?



オオマムシグサ

「山内 浩子」

山野草と茶花

その2 今も続くお茶

三原 静子



豊臣秀吉によって、千利休の天分はまさに大きく開花したのだが、それが秀吉にとっては不満だったのだろう。千利休は、一五九一年二月二十八日に自刃した。誰もが知る史実であるが、秀吉は利休が謝れば、その死を許すつもりだったという。しかし、利休はその美意識を全うし、秀吉におもねることなく果てた。そのことが、実は現在の茶の湯が継承されている所以である。

利休切腹の後、養子の小庵も罪に問われ、会津城主の蒲生氏郷にその身柄が預けられる。しかし、三年後、氏郷と徳川家康の働きで秀吉から免罪され、小庵は京都で茶の湯を始めることが許された。有名な「小庵召し出し状」である。利休七哲の一人と言われる氏郷がいなかったら、現在の茶の世界はなかったかもしれないと思うと、自分にとって氏郷は特別な人となった。

軽井沢に頻繁に行くようになり、多くの友人が出生た。その中でも特に親しくなった友人の旧姓が蒲生だという。しかも、男の兄弟の名前には氏郷の「郷」がついているという。耳を疑った。我が尊敬する蒲生氏郷の末裔かと思った。彼女は否定しているが、それが事実でなくても、四百年以上前から連綿と続く茶の湯の道を救った人との係わりを、このような身近なところで発見したことは、より深く私を茶の道へと誘った。

前置きが長くなってしまったが、そろそろ茶花の話しよう。利休にまつわる茶席の花には沢山の逸話が残っている。朝顔の時期に、庭一面に咲く朝顔を想像してやってきた客人が、何処にも花がなく驚き、茶席に入ったら、そこに一輪の朝顔があった。奇をてらう利休らしい逸話であるが、私はそこに利休の美意識があったのだろうと思う。庭に散った落葉を掃き清め、改めてそこにまた落葉を散らしたなど、利休の死から何百年たっても、その美意識は色褪せることはない。

昨年、軽井沢で、私にとっては人生に二度とは出ない茶会を開いた。やはり、一番気になることは、濃茶の席と薄茶の席の花だった。私にはこれらの席でぜひとも使いたい花入れがあり、茶花として紀伊上臈杜鵑(キイジョウロウホトトギス)を活けたかった。この花は、一昨年のNHK朝ドラ「らんまん」で、植物学者の牧野富太郎博士によって発見された話が出て、一躍有名になった。軽井沢のある場所には、この花が沢山咲いていることを私は知っていた。また、われもこの会の会員の間で株分けして、この花を増やしていることも聞いている。もとは紀伊半島南部に自生する花だが、今は乱獲によって絶滅危惧種になっているとか。とてもなまめかしく、美しい。「平安時代の上級貴族の上臈(貴婦人)の如く」ということから、その名が付いた。牧野博士に発見される前から、この花は日本にあったことになる。

茶会は十月十三日だった。自生のキイジョウロウホトトギスの花の時期は十月なのだが、今回は私の知る限り、花はみな枯れてしまっていて断念せざる

をえない。濃茶の席で使いたい花入れは、細い首の徳利だった。私は、本来は茶の席で使うことは許されないトリカブトを活けた。野にある花はなんでも茶花として使えるのだが、棘、毒、匂いのある花は避けるのが通例である。今回、私は敢えてこの禁句の花に挑戦した。一緒に活けた我が家の庭の紅葉とそれはよく合い、納得のいく花となった。

茶席には、茶会、茶事、稽古と、それぞれの中に必ず趣旨と意味合いがあり、また季節や花入れも伴う。それらに合う茶花を見つけることは、いつもとても難しく、だからこそ、合う花に出会った時の喜びはまたひとしおだ。

軽井沢には、茶の席で使ったことのない花がまだまだ多い。われもこの会の会の作業で山野草が次々と咲くのを見ると、

「この花を、この花入れに飾って、今の季節の茶会をしたものだ」と常々思う。「お茶と出会う花」を見つけることは、自分にとって無上の喜びである。



みはらしずこ

長野県上田市にて「信濃茶道会」というお茶の勉強会で茶道に出会い、以来四十年にわたり茶道の道を歩む。上田で「表千家茶道教室」を開いて十五年、茶道を地域に広めることを目指して地道に活動している。われもこの会の会員。

染料植物賦

小鮎草（コブナグサ）

たかの きみこ

黄八丈という織物の名前を知っている人は多いと思いますが、実際に見たことのある人はそう多くはないのではないのでしょうか。

半世紀も前の時代劇には、「黄八丈に黒い掛け襟を付けて、髪を桃割に結ったお侠な町娘」が出てきた記憶があります。「お侠」も「町娘」ももはや死語かもしれませんが、黄八丈は幾度もの消滅の危機を乗り越え、経済産業省や東京都の伝統工芸品として織り継がれています。

黄八丈とは、勿論その名の通り八丈島で織られる黄色を主体とした織物で、その黄色を染める染料が小鮎草（別名八丈刈安）なのです。一般に絹を黄色に染める染料といえば刈安（カリヤス）というイネ科の植物で、古代から広く使われていたものでした。それに対し、小鮎草はイネ科ではあるものの違う種類で、八丈島以外で染料として使われていたという記録はなぜか見かけません。

私が小鮎草を染料として使い始めたのは、東京郊外の鶴川に住んでいた頃、路傍に生えている小鮎草を見つけた時からです。茎を抱き込むように生える葉になる



ほど小鮎のような形をしていて、初めて見てもすぐにわかりました。群生しているというほどではありませんでしたが、せっかく生えているのだから使わない手は無いと見つけては摘んだものです。黄八丈の伝統的な染め方は、研究書によると、気の遠くなるような手間と時間、経験によってその色と堅牢度を得ているようで、とても真似のできるものではありませんが、私は私なりのやり方で優しい黄色を染めました。

その後、引っ越しの度に近所を散策して探すのですが、出会ったことがなく、軽井沢に来てからも未だ見つけることはできません。春、地を這うようにそれらしい草が生えてきたのでちょっと期待したのですが、残念、チヂミザサでした。一応試染はしてみましたが、やはりほとんど染まりませんでした。残念²。チヂミザサはこの地に

合っているのかやたら繁茂し、コブナグサよりトゲトゲとしていて秋になると芒が衣類にくっきます。なまじコブナグサに似ているのでちょっと憎らしく感じます。

やはり半世紀ほど前のことですが、若いタレントがパーティに黄八丈を着て出て、ロウるさい輩から非難を浴びるということが

ありました。黄八丈を紬（普段着）との認識からのものなのですが、実は繭1個1個から繰り出した糸を合わせた生糸を使った高級品なのです。

八丈島の八丈とは反物 2 反（1疋）のことで、昔から良質な絹織物を産出していた島ということからついた島名のようです。八丈島の織物には鳶八丈というのもあり、こちらはマダミ（イヌグス）の樹皮で染めた鳶色を基調にしたものを言います。今の時代には黄色が鮮やかな黄八丈より鳶八丈の方がしっくりくるかもしれません。

たかの きみこ

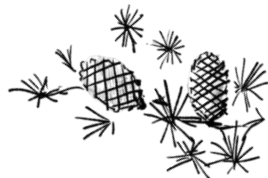
染織作家。軽井沢町追分に手織工房 槐（KAI）を主宰。天然素材を天然染料で染め、手織りならではの技法を用いて現代人の生活を潤す作品作りを行っている。われもこの会の会員。

たかのさんの「染料植物賦」のバックナンバーは、われもこの会の HP でお読みいただけます。HP の URL は 8 ページをご覧ください。



本や絵本が大好きな会員 2 人が、これまでに読んだ本の中から、野の草花を身近に感じる、お気に入りの書籍を 2 冊ずつピックアップしました。

本があると、山野草との出会いはもっとおもしろくなります。ぜひ読んでみてください！



西の魔女が死んだ

梨木香歩 著（新潮社 1994 年）

梨木香歩のデビュー作。学校に行けなくなった少女が「西の魔女」と呼ばれる祖母のもとに預けられ、自然に囲まれた山あい家で祖母と暮らすひと月が静かな筆致で描かれています。映画化もされた著名な本ですが、改めて読み返すと、リンドウ、野アザミ、ツリガネニンジン、クサノオウなど、たくさんの草花が登場して野の花好きの心をくすぐります。中でもギンリョウソウ、キュウリグサが少女の心に寄りそう場面がとても印象的です。



本好き会員 H.I. の
おすすめ
小説・エッセイ



春の数え方

日高敏隆 著（新潮社 2001 年）

高名な動物行動学者がやわらかい文体で綴ったエッセイ集。われもこの会の作業では、しゃがんで草花の茂みに手や頭を突っ込み雑草を引き抜きます。葉から露がキラッと飛び散り、土の香りがフワッと立ち上り、虫たちがあたふたと逃げていく。そんな時、日高さんのエッセイの一編を思い出し、地面の上にも下にも多くの生命が息づいていて、自分のその一部なんだなあと改めて気づくのです。「春の数え方」ってタイトルも素敵です。



本好き会員 Y.M. のおすすめ
絵本



ほたるホテル

カズコ・G・ストーン 作（福音館書店 1998 年）

カズコ・G・ストーンの「やなぎむら」シリーズです。草とそこに暮らす虫たちの物語。夏になると虫たちはいろんな草でベッドを作り、ホテルを営業します。その名もほたるホテル。やえむぐらの 2 段ベッド、つゆくさベッド、ねこじゃらしベッド、おおばこのベッドなどたくさんの草が登場し、たくさんの虫たちが登場します。ほたるホテルで過ごす美しい夜の光景を絵本の中で味わってみてください。

かなとおばあちゃん

安江リエ 作 山内ふじ江 絵（福音館書店 1992 年）

団地に住む草むしりをしているおばあちゃん。古ぼけた麦わら帽子に手には鎌！団地に住む「かな」はおばあちゃんのことがかちょっと怖いのですが...なんとおばあちゃんはかなの大好きなクローバーやねじり花を残しておいてくれたのです！外来の草を抜き、在来山野草を育てるわれもこの会の活動は、おばあちゃんの草むしりそのもの。この原っぱの豊かさに惹かれ、草花が大好きになる子どもはきっといるはずと思える作品です。



仲間を悼む

Memories to cherish

大槻幸一郎さんのこと



一昨年五月、「C.W.ニコル・アフアの森」を軽井沢サクラソウ会議やわれもこの会の仲間と見学しました。ニコルさんと古くからの友人である大槻さんは、二人の出会いから説き起こし、車中で詳しく説明してくれました。森の見学とともに、あの解説を心に刻まれた参加者も多かったのではないのでしょうか。

帰路についてまもなく「近くに美味しいジェラートがあるのですが、時間が無くて案内出来ず残念です。」と話されたのを憶えています。甘いものがお好きでしたね。いつも珈琲とともにデザートは必須でした。

大槻さんとの出会いは、大槻さんが千葉県副知事を退任され、軽井沢に移住された二〇〇六年秋、われもこの会の会員の江川さん宅であったと思います。以来、色々な面でご指導、ご助言をいただいてきました。

軽井沢町自然保護審議会長に就任後、環境基本計画策定に尽力され、馬取の農地整備事業については、審議会として町長に意見具申するなど、会本来のあるべき姿を見せてもらいました。現場に何度も足を運んだうえでのご意見は重く、説得力にあふれていました。

アフアの森以外にも多くの活動にかかわる傍ら、われもこの会の作業にはいつも顔を見せて、写真記録を残してくれました。なかでも集合写真は笑いが多くて楽しみてしたね。

数年前、湯川沿いの散策路整備活動のお声がけをしました。お忙しいなかでしたが、「俺もやるぞ！机の上の議論はもういいよ。」との答えには驚きました。

手鋸作業、樹木や草花の名札掛け、山野草の移植など、ご専門の森林管理の知見には、町地域整備課の担当から絶大な信頼がありました。大槻さんの柔和な表情、お人柄からか、高校生や役場職員、通りがかりの方までもが作業に参加してくれました。

いつも穏やかに相談に応じてくれましたが、時には「簡単に諦めちゃいかん！」と叱咤されたものです。まだまだ眠っちゃおれん、という声が降って来そうな気がします。いつまでも優しさにあふれた笑顔で、私たちの活動に寄り添ってください。

〔須永久〕

田口友巳さんのこと



昨年二月十八日にお見送りしてから、早いものでもう一年を過ぎました。あの日は晴天に恵まれ、暖かな日でした。今年も晴天に恵まれた庭先には、チューリップ、スイセン、ヒヤシンス等の芽が出始め、ヤマブキの小枝が緑を濃くして春の息吹を感じます。

下発地の花壇で初めてお会いしてから二年ほど経ち、お互いの庭の訪問を重ねるようになりました。いただいたフジバカマ、カッソソウなどが育ち、旺盛に咲き始めますと、田口さんがそこにいらっしやるような気持ちになります。


短かった逢瀬ではありましたが、今でも花を通じて忘れる事のない思い出が甦ってまいります。花々が田口さんとの再会を促すかのようです。

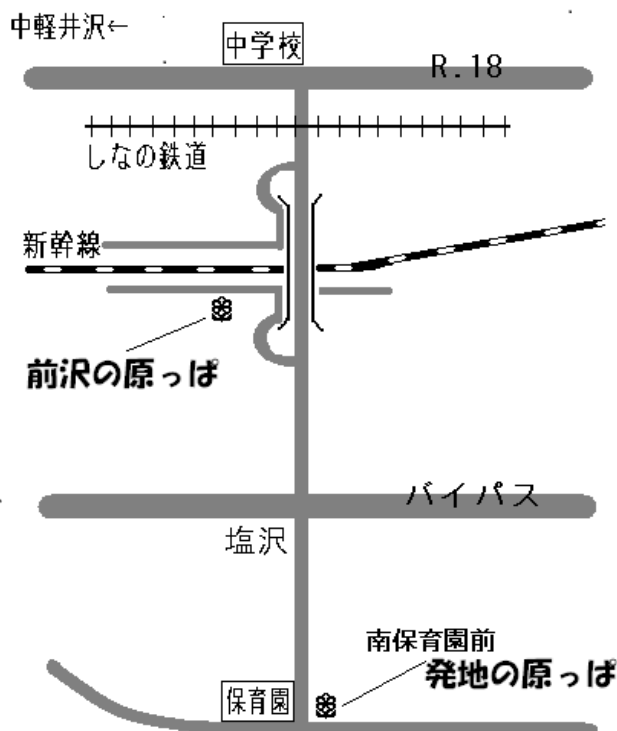
庭の山野草とともにご冥福をお祈り申し上げます。

〔平井道子〕



われもこの会の活動の中心は、春から秋、
月2～3回の「原っぱ」の草むしりです。1時間ほどの作業を終えたら、お茶とお菓子の時間(時にはアイスクリームも！)。和やかなおしゃべりタイムのあと、みな口々に「今日も原っぱがすっきりしたね～楽しかった～」と帰路につきます。

- ▶ 集合時間： 午後 1 時 30 分
ご注意！！ 7/13(日)と8/3(日)のみ午前 7 時集合です。
 - ▶ 場所： 日曜日は「発地」の原っぱ
水曜日は「前原」の原っぱ
 - ▶ 雨天中止
小雨の場合、決行することもあります
 - ▶ 持ち物：
園芸用手袋、スコップや草刈り鎌、日よけの帽子、
長靴、飲み物(熱中症予防に)
- 



2025 年の作業日

4月23日(水)
5月11日(日)、28日(水)
6月8日(日)、18日(水)、29日(日)
7月2日(水)、13日(日)、23日(水)
8月3日(日)、27日(水)
9月7日(日)、17日(水)
10月5日(日)、15日(水)
11月9日(日)

※暑さ対策のため、7/13(日)と 8/3(日)は、
朝 7 時から作業開始です。



当会の会員数は現在 32 名で、女性 25 名、男性 7 名。
 発足当初からの会員には年齢 80 を超える方も。
 30 代～80 代と幅広い年齢層の会員たちが、カンカン
 照りの真夏の太陽の下で和気あいあいと、でも一心不
 乱に草むしりをする様子を見ていると、「草を取るなら、
 根をよく取りやれ」— 臨済宗中興の祖と称された白隠
 禅師の「草取唄」が頭をよぎります。(H.I.)

❀.....❀..... 会員募集中!❀.....❀

年会費 1,000 円
(ご家族で入会の場合、2 人目から 500 円)
原っぱの作業日、お気軽に見学にお越しください！
ご質問など、HP のお問合せフォームからどうぞ。



お知らせ

第13回ちいき活動みほん市

期日：2025 年 6 月 15 日(日)
時間：午後 1 時 15 分～3 時 45 分
会場：軽井沢町中央公民館
主催：第 13 回ちいき活動みほん市実行委員会
共催：軽井沢町社会福祉協議会

われもこうの会の山野草コーナーに、ぜひお立ち寄り
ください！アサマキスゲ、オミナエシ、サクラソウ、
レンゲショウマ、ワレモコウなどの苗が揃う予定です。

発行: 野の花を増やす会 われもこうの会 <http://waremokou.whitesnow.jp/waremokou3/>